

# ヨーロッパ剣道の普及状況

## —第28回欧州剣道選手権大会を通して—

小田佳子\*・村松常司\*\*・恵土孝吉\*\*\*

### はじめに

欧州剣道選手権大会 (European Kendo Championships : 以下、EKCとする) は、1974年から3年に2回 (3年に1度開催されている世界剣道選手権大会の谷間の2年)、欧州剣道連盟 (EKF) の主催により開催されている。男子個人は第1回から、女子個人は第9回から、ジュニア個人は第12回から行われ、現在は、男子団体・個人、女子団体・個人、ジュニア団体・個人の計6部門が行われている。

1970年に国際剣道連盟が発足し、世界大会 (WKC) が開催されるようになって以来、アジア大会すら存在しない剣道の国際事情の中で、現在では国際剣道連盟 (FIK) の最大派閥である欧州剣道連盟がいち早く欧州大会を企画し定着している。EKFの開催状況から剣道の国際的普及の実態を伺い知ることも可能であろう。

そこで、本報告では、第28回ヨーロッパ剣道選手権大会の大会報告を通して、参加国と参加者数、大会の運営状況、競技内容および審判の判定基準などを詳細に報告し、FIKの最大派閥であり中心組織であるEKFの組織としての成熟状況と剣道の国際的普及の状況を考察しようとするものである。

### 1. 大会日程と運営

第28回ヨーロッパ剣道選手権大会 (The 28th European Kendo Championships) が2017年5月12日～14日にハンガリーのブダペストで開催された。3日間にわたる大会日程は、1日目 (12日) がジュニア団体戦と成人女子団体戦、2日目 (13日) がジュニア個人戦と成人男子団体戦、3日目 (14日) が成人女子個人戦と成人男子個人戦であった。

ヨーロッパ剣道連盟が主催する本大会には、全日本剣道連盟 (全剣連) とEKFから、それぞれ以下5名ずつの代表派遣があった。

- 全剣連5名 (Toru Kamei : 八段, Tsuneharu Someya : 八段, Yasushi Hirao : 八段, Yukio Sato : IKF事務局長, Masayuki Miyasaka : IKFアンチドーピング委員会会長)
- 欧州剣連5名 (Alain Ducarme : ベルギー, Dieter Hauck : オーストリア, Pekka Nurminen : フィンランド, Zsolt Vadadi : ハンガリー, Riack J. Pierre : フランス)

#### (1) 大会日程

本大会の大会日程は以下のように示されている。

日時・場所 : 2017年5月12日 (金) ~ 14日 (日)

公営体育館 Túskecsarnok (住所 Magyar tudósok körútja 7, 1117 Budapest)

スポーツ・コンプレックス・チュスケクザルノックにて

---

\* スポーツ健康科学部 准教授 \*\* スポーツ健康科学部 教授・学部長 \*\*\* 金沢大学名誉教授

大会日程：5月12日（金）ジュニア団体戦・成人女子団体戦  
5月13日（土）ジュニア個人戦・成人男子団体戦  
5月14日（日）成人女子個人戦・成人男子個人戦

## (2) 運営および大会要項

主催はヨーロッパ剣道連盟、主管がハンガリー剣道・居合道・杖道連盟、技術補助として全剣連が携わっている。実質的大会運営は、EKFとハンガリー剣道連盟が担い、25名が大会実行委員としてパンフレットに記載されていた。その中には、以前JAICA派遣でハンガリー剣道連盟に貢献した現・大阪府剣道連盟事務局長の木部氏も日本からの派遣委員に含まれていた。

大会要項に示された試合審判規則は、国際剣道連盟の試合審判規則および細則（2006年12月7日改訂）に従うこととされている。大会内容として以下のように各種目構成が提示されていた。

成人男子団体戦：7名の登録者からの5名構成。成人男子個人戦：18歳以上の成人男子4名まで。

成人女子団体戦：7名の登録者からの5名構成。成人女子個人戦：18歳以上の成人女子4名まで。

ジュニア団体戦：5名の登録者からの3名構成。ジュニア個人戦：4名まで。

※ジュニアの部では、15歳以上18歳未満とする。特例は認めない。（誕生日が、1999年5月12/13から2002年5月12/13までであること。）

本大会要項の特記事項としては、ジュニア個人の部で、決勝トーナメントでの「延長」は、成人のように時間無制限ではなく最長6分とし、勝負が決しなかった場合は「判定」を採用した。ただし、準決勝・決勝はこの限りではないとされた。結果的に、本大会のジュニア個人の部では、判定によって勝負が決せられたものはなかった。このルールの効果かどうかは不明だが、特にジュニアの部では、積極的な打突と攻防による試合展開が随所にみられ、防御に徹した消極的な試合をする選手が極めて少なかった。

## (3) 大会運営上の所感

本大会の観戦者は事前に大会HP上から入場登録が必要であり、入場料は無料だったが、入場の際に必ず治安上の本人確認が必要とされ、入場の際に1日分のアームベルトが渡された。運営側によれば、今大会に際しハンガリー政府から補助金を捻出しているが、その支出金が、体育館借用料と上記の体育館専属警備費等に使用されることが前提とされているという説明であった。いずれにせよ安全で快適な施設が使用されていた。また、大会要項や大会会場へのアクセス、大会結果など適時大会HP上に必要事項が英語でアップされ、国際大会としては極めて簡便な方法で情報提供がなされていた。ただし、大会会場の電子掲示板の見方が分かりにくかったことが課題であろう。

EKFのシンボルマークが、以下のように図1から図3のように、似て異なる3種類のマークがばらばら使用されていた。実際には、どのマークがEKFのシンボルなのか不明であった。大会会場、パンフレット、HPと全て異なっていた。その原因は、EKFにおいてシンボルマークにある3本の刀の意味するところが不明だからであろう。刀の刃の向きが、上向きなのか、下向きなのか、はたまたなぜ3本あるのか、改めてその概念を確認

したうえで大切に使用したいところである。

WKCとの比較では、WKCで廃止された勝利チームの国歌斉唱について興味深い習慣が残っていた。男女とも



図1



図2



図3

に団体優勝を果たしたフランスチームが、国歌斉唱を観客席と一緒に進んでいた。周りのチームも恒例のように、その国歌斉唱を静かに聞いていた。ナショナリズムを高揚するとの全剣連の意向から、開・閉会式での国歌斉唱を廃止したが、団体優勝チームからの自然な祝福ムードの流れとして、EKCではこの習慣が独自に残されていた。さらに、開会式でのお国柄に即したユニークなパフォーマンスが興味深かった。

また、観戦者に対して試合中の声援や口笛について、1日目は、「声援や口笛を控えるよう」放送を用いてかなり注意喚起が促されていたが、2日目の男子団体戦からは、さらに口笛等が大きくなっているにもかかわらず、注意喚起は全く行われなくなった。この状況は、韓国でKBSの全国大会を観戦した時の状況を彷彿とさせる同様の状況であった。当然、EKCとはいいつつも観戦者数は決して多くはなかった。

大会パンフレットについては、各国選手団の写真は掲載されているが、さらに大会日程および大会要項や規定の記載が必要であろう。さらに、ジュニアの部やシニアの部の参加規程があるにもかかわらず、写真上はおおよそその年齢規定に合っていないと思われる参加者も若干名見受けられた。今後は、これらの参加者資格の確認作業の必要性も生じるのではないだろうか。

本大会には全剣連からFIKアンチ・ドーピング委員会の責任者であるDr. Miyasakaが帯同していた。大会要項にもWADAに従ったドーピング検査が実施される旨が記されていたが、本大会においてどの程度までドーピング検査が実施されたのかは不明である。

## 2. 大会参加国と参加者数

### (1) 参加者

本大会の参加国と登録選手・役員数は、大会HPから算出し表1に示した<sup>1)</sup>。参加国は41ヶ国であったが、そのうちのアンドラは、選手が不在で役員1名のみが出席したので、選手の試合参加はなかった。大会参加者は、登録した選手と役員を含めて合計546名であった。

表1. 参加国と参加者数（※国名のアルファベット順）

	国名	役員(m)	役員(f)	成年男子	成年女子	ジュニア
1	Andorra	1				
2	Austria	2	2	6	7	1
3	Belgium	2	2	7	6	3
4	Croatia	4		7	3	1
5	Czech Republic	1		7	1	5
6	Denmark	2		2	1	2
7	Estonia	1		5	1	
8	Finland	3	1	6	6	1
9	France	6		7	6	4
10	Georgia	2		2		
11	Germany	5		7	7	2
12	Greece	3	1	6	7	1
13	Hungary	5		7	6	5
14	Ireland	3		8	1	
15	Israel	2		6	1	2
16	Italy	4	2	6	6	4
17	Jordan	1		2		
18	Latvia	1	1	5	1	1
19	Lithuania	3		5	3	
20	Luxemburg	2		6		

21	Macedonia(F.Y.R.o)	2		5		1
22	Malta	1	1	1		
23	Montenegro	2		5		
24	Netherland	3	1	6	5	
25	Norway	4		7	5	2
26	Poland	5	1	8	8	1
27	Portugal	5	1	7	5	
28	Republic of Moldova			8	1	
29	Romania	4	1	7	5	5
30	Russia	3		5	2	3
31	Serbia	3	2	7	7	5
32	Slovakia	1		6		
33	Slovenia			1	2	
34	South Africa	1	1	5	1	1
35	Spain	2	1	7	7	3
36	Switzerland	2	1	7	5	2
37	Sweden	3	1	9	5	1
38	Tunisia	1		6		
39	Turkey	2		6	6	
40	Ukraine	1	1	6	1	
41	United Kingdom	3		7	5	2
	total (n=546)	101	21	233	133	58
	%	82.79	17.21	63.66	36.34	13.68

大会参加者数の内訳として、役員が122名であり、その男女比は男性役員が82.8%、女性役員が17.2%であった。選手層の男女比が6.4 : 3.6であるのに対し、役員は8.3 : 1.7という結果から、欧州でも剣道の組織運営に長く携わっている女性の絶対数がまだ少ないことを示している。EKCの歴史を眺めても、1970年に国際剣道連盟が発足し、1974年から第1回ヨーロッパ選手権大会が始まり、当時から第8回まで男子個人と男子団体のみで大会が開催された。1989年の第9回から初めて女子個人の種目が追加され、1993年以降から女子団体とジュニアの部が加わった<sup>2)</sup>。WKCに親善試合として女子団体の部が加わったのが1997年であることから、欧州での女子選手の育成の上に、国際的に女子剣道選手の参加要請がみられるようになり、国際的にはまだ20年程度の歴史しかない。つまり、選手から指導者となり各国の剣道組織運営に携わる女性の割合として、欧州での17.2%は、日本体育連盟に所属する全剣連の組織役員の女性比0%に比べれば、極めて自然な流れであると考察できる。ただし、日本では剣道に対して、歴史的になぎなたで女性にその門戸が開かれてきたといえる。日本国内では、武道の文化内での男女の住み分けが存在していた。そのため、現在でも日本体育連盟に所属するなぎなた連盟の組織役員の男女比は、剣道のそれとはまったく逆転し、男 : 女 = 9 : 1であることもまた明らかである<sup>3)</sup>。

大会参加選手は、成人男子が233名、成人女子が133名、ジュニアが58名であった。成人男女選手の部は、団体登録が7団体、個人登録が4名までであった。ジュニアの部は、団体登録が5名まで個人登録が4名までであった。

それぞれ参加選手を男女比で見ると、成人登録では成人男子が63.7%に対し、成人女子は36.3%で、日本の男女比とほぼ同じ様相であった。またジュニアの全参加選手に占める割合は、13.7%と低調で、欧州におけるジュニアへの剣道普及にはまだまだ理解と努力が必要な状況にある。

## (2) 参加国

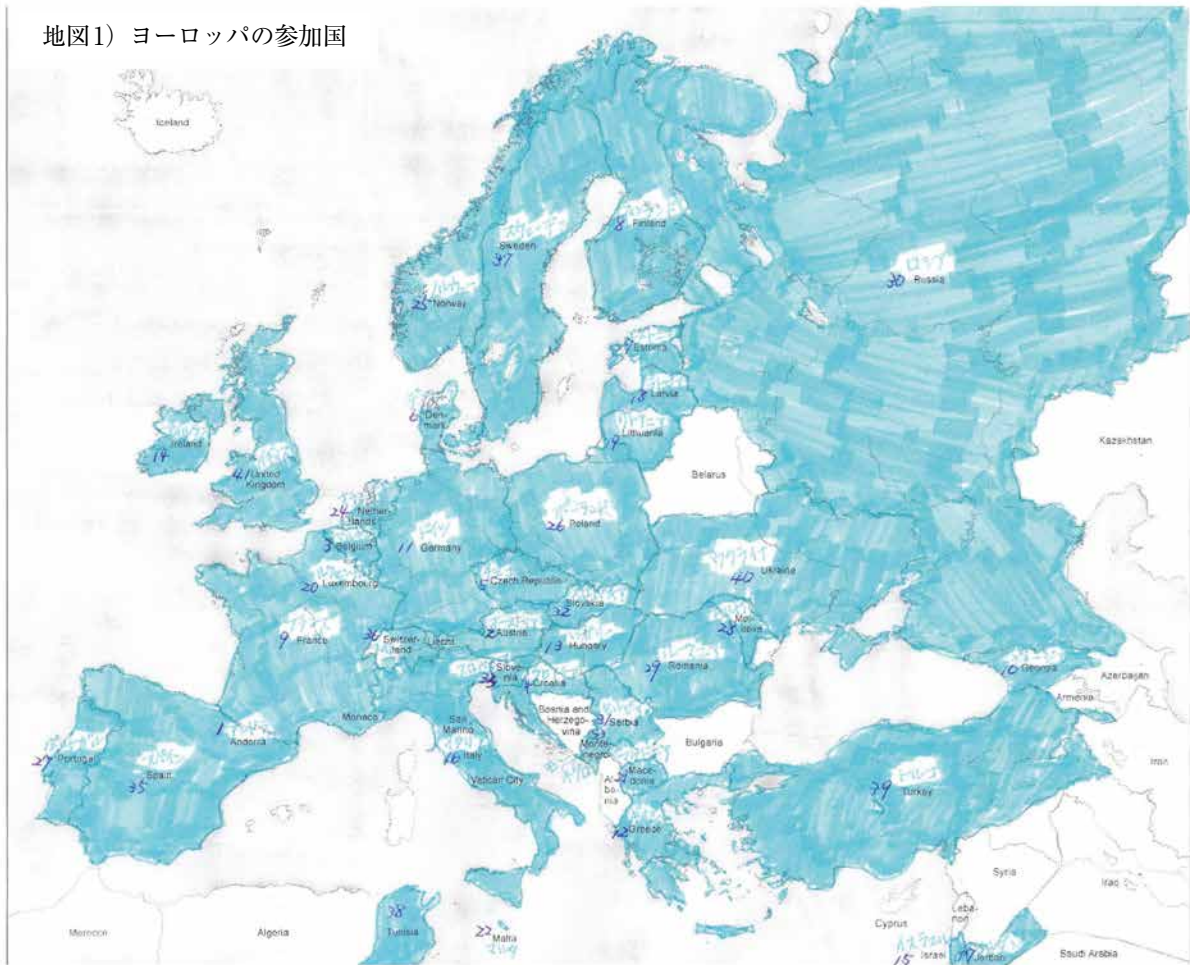
今大会参加41ヶ国の地理的な位置を確認するために、地図1)と地図2)にその地理的な範囲を示した。

地図1) 2) に示されたように、EKFには、経度上、イギリス、アイルランドなどの全ヨーロッパからロシアまでが含まれ、緯度上では縦長に、北緯のスκανジナビア半島から南緯の南アフリカまでが含まれている。2015年に日本で開催されたWKC世界大会の参加国が56ヶ国であったことから、EKFに所属する剣道団体の数の割合を算出すると、実に73.2%になる。剣道人口や普及状況はともかくとして、参加国および登録国としての数の上では、FIKに占めるEKFの団体数は、まさに最大派閥といえる。

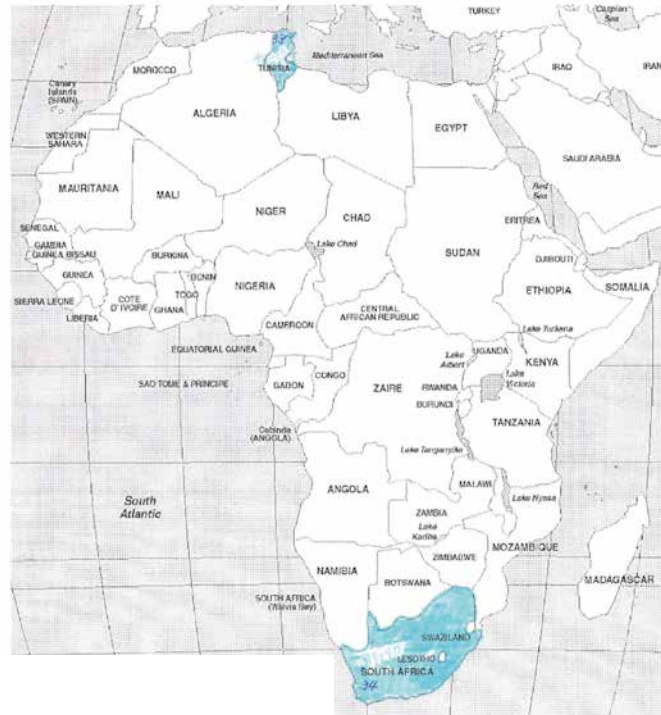
この状況を詳細にみると、地図1) のように、ロシアを含む欧州北部、ロシアから独立したエストニア、ラトビア、リトアニアといった国々が個別に登録され、さらにロシアとは現在も緊張関係にあるウクライナなどの国が含まれる。また、欧州南部にみられるように、剣道の新興勢力となっているのが東欧諸国の中で、特に、ハンガリーを含め、それよりも南部に位置するスロベニア、クロアチア、セルビア、モンテネグロ、マケドニアといった、かつてのユーゴスラビアの分断による国々となっている。また、その普及と分布状況は、ジョージアを含む中東のイスラエル、ヨルダン、さらにアフリカ大陸ではチュニジアと南アフリカにまで及ぶ。地中海に浮かぶマルタ島もまた、1加盟国としての登録されている。

地図2) にはアフリカ大陸の加盟国が示されている。チュニジアと南アフリカの2ヶ国のみである。その要因としては、社会的、民族的、風土的、気候的な様々な要因が考えられるが、ここではFIK、全剣連ともに国際的な普及活動を展開している訳ではなく、自然に伝播・普及する状況に対応しているのみである。

地図1) ヨーロッパの参加国



地図2) アフリカの参加国



### 3. 競技上の技術的・戦術的側面

#### (1) 技術的・戦術的側面

日本の中高校生や学生の試合で散見され、現在では試合の申し合わせ事項等で反則の対象とされている「三所隠し」が多発していた。この三所隠しに対しては、EKFでは未だ日本の様に反則行為として認定されていないために、特に男子の試合では、初太刀からの逆胴が多く見受けられた。ただし、その一方で、逆同を有効打突とする判定もあまりなく、「三所隠し」が防御上優位に横行している印象を受けた。結果的には、左手を挙げて防御に徹する見苦しい試合が展開される場面が見受けられた。ただ、この姿勢や試合展開を見苦しいと感じるのは、そのような認識が植え付けられている日本人剣道愛好者だけかもしれない。しか

し、もしもこのような状態で試合が展開されるのであれば、手元を挙げて防御する相手に対する逆胴や引き技が有効打突として、積極的に審判に認識されるべきであろう。

また、面返し胴などの面に対して胴を繰り出してからの打突者のあまりに無防備な対応が、男女にかかわらず随所にみられ、試合における初心者指導の典型パターンとして気になった。胴を打ってから、相手から抜ける足さばきの遅さと、十分な間合いでない位置での無防備な振り返りに、相手に追いかけて面をもらう典型的な場面が多発していた。

試合中転倒し、脳震盪を起こして棄権するというケースが生じた。これは日本の学生の試合でも起こりうるケースではあるが、欧州では日本よりも多発している。体当たり時の腰の重心を低くして互いに当たるといっても、重心の位置が高く、打突後に身体が伸び切ったところでぶつかり後頭部から転倒する。

全体的に参加40ヶ国の内、技術的にも経験的にもずば抜けた実力を発揮していたのがフランスであった。結果的にも男女ともに団体優勝を収めた。剣先がぶれず、足腰が安定しており、まさに日本剣道のような剣道を試合でも展開していた。中心選手も日系人であった。フランスでは男女ともにジュニアの育成を含めて、他国を寄せ付けない層（剣道人口）の厚さを感じた。フランスは、柔道の国家育成制度に剣道が含まれ、選手育成に対して金銭的にも他国とは比べものにならないほど恵まれているということを知った。

また、今回の大会からその台頭が感じられた国々は、ジュニアで優勝したロシアやポーランド、そして常に上位に入るハンガリー、セルビアなど、いわゆる東欧諸国であった。剣道技術はまだまだ荒く未熟ではあるが、試合に対する勝負勘、間合いの取り方、身体が不安定でも打突部位に当てる身体能力の高さを感じられた。

男子団体戦で、2位になったイタリアチームに対し、「決勝トーナメントの組み合わせを考慮して、予選リーグを故意に2位通過した」という憶測が各国チームから囁かれていた。決勝トーナメントを考慮した上位進出のための各チームの戦略は様々に当然であると考えられる。日本でも高校総体などではそのような戦略を高校生に告げる監督（指導者）がいることは否定できない。しかし、こと剣道においては、1試合1試合にベストを尽くすべきとのフェアプレイ精神が、EKFの多くのチームに浸透しているようであった。

## (2) 大会結果

大会結果として各種目別の入賞国と入手者名を以下に日本語で示す。

- 1) 成人男子の部 団体戦  
優勝：フランス 準優勝：イタリア 3位：ポーランド、ハンガリー
  - 2) 成人男子の部 個人戦  
優勝：イトウ（フランス4） 準優勝：フリッツ（チェコ2）  
3位：マンディア（イタリア1）、マエモト（ベルギー3）
  - 3) 成人女子の部 団体戦  
優勝：フランス 準優勝：ポーランド 3位：オランダ、ハンガリー
  - 4) 成人女子の部 個人戦  
優勝：ストラーツ（フランス1） 準優勝：アキラ（ギリシャ3）  
3位：ドアント（ベルギー4）、アデ（ドイツ4）
  - 5) ジュニアの部 団体戦  
優勝：ロシア 準優勝：フランス 3位：イタリア、ドイツ
  - 6) ジュニアの部 個人戦  
優勝：モウターデ（フランス2） 準優勝：コメトフ（ロシア3）  
3位：デブレイ・デスコット（フランス1）、シビノビック（セルビア4）
- ※（国名・番号）この番号は、各国内での大会登録番号を示す。

## 4. 審判制度と判定基準

### (1) 審判制度

審判員は、ヨーロッパ各国から六段以上の4名の女性を含む計30名が登録され、1コートに審判主任を含めて7名ずつ、4コートにそれぞれ配属された。

審判は4コートに6名ずつ配置され、本多（2009）の報告にあったような、EKCにおける審判員不足の過酷な1日平均審判数の条件は改善されつつあると考えられる<sup>4)</sup>。しかし、3日間にわたり朝9時から17時まで展開される試合数の中で、1交代ずつではやはり条件的に厳しいと言わざるを得ない。

さらに、今大会では各コートにコート主任が配置されていた。中央の2コートには全剣連派遣の八段2名、残りの2名はEKF派遣の2名であった。彼らは、各コートの審判ローテーションには加わず、交代することもなく全試合を注視し、審判の判定に疑問があれば、笛を吹いて適時指摘を与えていた。同時に、2018年WKCのための審判候補者を評価し選抜するという名目がある。ただし、このコート主任の責務は、終日、担当会場の全試合を注視する必要があるという意味で、審判者よりも過酷な状況にあると推察される。

審判の所作として、審判が副審の位置で、一人ずつ交代する場合に、試合場から出る方向が、まちまちであった。試合場を出て交代する審判は、試合場を背にして出るように、直近の欧州での審判講習会で指導があったようである。これまでは、主審を背にすることなく、試合場内を正面にして後ろ足で退場していた。

### (2) 判定基準

有効打突の一本の基準が、日本の学生選手権などの基準に対して甘いというか低いように感じられた。当然のように、当たれば一本という感じであった。タイミングが良ければ、当たっていなくても旗が上がっている場面が多く見受けられた。特に、「残心」に対する見取りが全くなく、選手は打突後にも全く

残心を示さず、日本では取り消しとなるような打突も有効打突になっていた。

## おわりに

本論では、2017年5月12～14日に、ハンガリーで開催された第28回ヨーロッパ剣道選手権大会の観戦報告を行った。大会の参加国は、登録41ヶ国であったが、アンドラからの選手参加はなかったため40ヶ国となった。参加者数は、各国の役員が122名、選手は成人男子が233名、成人女子が133名、ジュニアが58名であった。参加者の男女比の割合とジュニアの参加数から、今後のEKF各国での普及と組織運営に課題が認められた。地理的には、EFKはロシアを含めほぼ欧州全土に普及している様子が明らかになったが、その一方でアフリカ大陸ではチュニジアと南アフリカの2ヶ国のみの普及であり、実質的にはアフリカ大陸での剣道の普及は認められなかった。

大会の運営状況は、基本的にハンガリー剣道連盟（25名）の適切な運営によって、おおむね整然と時間的にも予定通りに試合が展開されていた。会場である体育館でも観戦者の事前登録を実施し、入場時にセキュリティ・チェックがあった。国際大会であり、日本の大会よりも大会HPが充実しており、大会参加に関しても、選手登録、結果の確認などネット上でスムーズに行える仕組みが確立されていた。試合内容では、いわゆる三所隠しが横行しており、罅迫り合いの反則と同様に、FIKの国際規定では改めて審判団での合意形成ができない限り、反則とされない。

試合結果からも実力的には、フランスがヨーロッパの中でも群を抜いている印象がある。さらに、ロシアやポーランド、ハンガリー、セルビアなどの東欧諸国の台頭が顕著であった。

審判の判定基準は、日本のそれと比較して低いように感じられた。具体的には、当たれば一本という感じで、タイミングが良ければ当たってなくても旗が上がっていた。特に気になったのは、「残心」に対する見取りが全くなく、残心を示さない選手も多くいたし、またこれに対する有効打突の取り消しもなかった。

今大会運営を通して、FIKの最大派閥であるEKFの組織としての成熟状況を考察すれば、1974年のEKF創立以来40年余り、着実に欧州における剣道の普及を展開し、日本の剣道を尊重する形で、1つの日本の伝統文化として実践し、成熟しつつある状況がみてとれた。剣道を他の日本武道である柔道や空手とは差別化し、長年にわたり居合道と杖道を含めて彼らのライフスタイルに即して修練する姿勢には敬意を表したい。しかし、他方で、国際組織としてのEKFを眺めたとき、FIKに所属する一つのエリア団体として、EKCなどを運営し、その地域での剣道を通じた交流など、その主要な機能を果たしているのに対し、FIKを傘下とするような組織運営を展開している全剣連の在り方が、そう遠くない将来、EKFから問われるような状態になるのではないかと危惧される。

## <文献>

- 1) 第28回ヨーロッパ選手権大会HP  
(<http://ekc2017.hu/delegations/countries-delegations/undefined> 検索2017年5月22日)
- 2) ヨーロッパ剣道連盟HP  
([https://en.wikipedia.org/wiki/European\\_Kendo\\_Federation](https://en.wikipedia.org/wiki/European_Kendo_Federation) 検索2017年5月20日)
- 3) 日本スポーツとジェンダー学会編『データでみるスポーツとジェンダー』八千代出版, pp.62-72
- 4) Sotaro Honda (2009) A Study of Logistical Issues with Refereeing in the Internationalization of Kendo -with the focus on the European Kendo Championships- 武道学研究41- (3) ,pp.1-11